

博士論文審査要旨

論文審査担当者

主査	明星大学教授	板野	和彦
副査	明星大学教授	樋口	修資
副査	明星大学教授	星山	麻木
副査	福島大学教授	杉田	政夫

申請者氏名 細川 匡美

論文題目 「ジャック＝ダルクローズの教育観の発展に関する研究—ルソー研究所、クラパレード、モンテッソーリ、ドクロリーとの関わりを中心に—」

(論文審査の結果の内容)

(論文審査の結果の内容)

本研究ではリトミックの創案者であるジャック＝ダルクローズと同時代の教育機関や教育者たちとの関わりを明らかにした上で、この関わりによってジャック＝ダルクローズの教育観がどのように発展したかを検討し、それが当時の教育の中でどのように位置づけられるかを考察する。

第1章ではルソー研究所とジャック＝ダルクローズの関わりについて検討した。ルソー研究所が発行していた「プログラム」を参照することにより、長期間にわたって当研究所の幼児教育施設「メゾンデプチ」でリトミックによる教育が実施されていたことが明らかになった。またジャック＝ダルクローズと当時所長を務めていたクラパレードとの間にかわされた書簡を参照することによってジャック＝ダルクローズの研究所とルソー研究所の間で相互に教員研修が実施されていたことも明らかになった。

第2章ではクラパレードとジャック＝ダルクローズの関わりについて検討した。両者は数多くの往復書簡を残しており、この中でジャック＝ダルクローズは自分の教育を発展させるために教育学・心理学についての専門的知識が必要であり、リトミック発展のためのアドバイスをクラパレードに求めている。ここから、リトミックを科学的な教育法として発展させ

たいというジャック＝ダルクローズの基本的な姿勢が伺われる。

第3章ではモンテッソーリとジャック＝ダルクローズの関わりについて検討した。ジャック＝ダルクローズは自分の息子をモンテッソーリの教育機関であるメゾンデプチに通わせていたとされており、彼女の教育に深い関心を寄せていた。またモンテッソーリは『初等学校における自己教育』（1916）においてジャック＝ダルクローズのリトミックの練習を取り上げている。両者が互いの教育法に関心を持ち、また評価しあっていた。

第4章ではドクロリーによるリトミックの受容について検討した。ドクロリーは自身の学校のカリキュラムにリトミックを取り入れ、その弟子たちもまたリトミックを実践していた。ドクロリーは実践だけでなく、著作の中でリトミックについて述べるなどその理論と内容を理解し、そして評価していた。

第5章ではジャック＝ダルクローズの新教育連盟における活動について検討した。ジャックは新教育連盟の機関誌の創刊号に『リズム』というタイトルの小論を寄稿し、第2回モントルー会議に参加し、子どもたちによるデモンストレーションも行った。音楽教育にとどまらず、幅広い視野をもって教育について研究してゆきたいという意志が感じられる。

以上の検討はすべて原著あるいは一次資料を用いて行った。特にクラパレードとの書簡についてはジュネーヴの図書館蔵のものを取り寄せて翻訳、検討を行い、モンテッソーリの著作については邦訳がなく、参照されることも少ないため、モンテッソーリがリトミックを高く評価していたことは本稿によって初めて明らかになった。

本研究では、ジャック＝ダルクローズがリトミックを、単なる技術習得のための教育ではなく、人間の持つ幅広い能力を伸ばすための教育と捉え、これをあらゆる人々のために活用してゆきたいと考え、研鑽を積み、これが多方面の研究者たちから集中力や社会性を引き出す等、人間の諸能力を高める教育法として評価されていたことを明らかにすることができた。よって、本研究は博士（教育学）の学位を授与するに十分価値あるものと認める。

（試験および試問の結果の要旨）

本論文については主査1名、副査3名による口頭試問と公聴会にて審査を行った。口頭試問ではクラパレードの理論について説明が不足しているとの指摘がなされ、これを修正し公聴会に臨んだ。公聴会においては「数多くの資料を詳細に検討した成果である。」との評価を受けた。

上記の通り慎重に審査した結果、合格と判定した。